

緑陰随想

東南西北の守り神

尾道市古浜町 田 辺 泰 登

古墳の四獣神

マスクだらけの大阪を通り抜け、奈良県飛鳥村で公開中のキトラ古墳の壁画を見に行ってきました。

キトラ古墳は、飛鳥美人群像で有名な高松塚古墳と同時代の7～8世紀に作られ、場所も近くにあります。今回の目玉は初公開となる石室の東の壁に描かれた青竜です。実物はほとんどが泥で被われており、赤い舌や前脚、顔の一部しか見分けることができません。しかし赤外線検査で得られた情報を元に、高松塚古墳の青竜像を参考として描かれた素晴らしい想像図が復元されていました。

青竜の他、西の壁の白虎も同時に展示されており、こちらはほぼ完全に復元されていました。来年以降、南壁の朱雀(鳥)、北壁の玄武(亀と蛇)と次々と公開が予定されており、四方の四獣神が全て揃うのが楽しみです。

陰明師

平安時代の陰陽師である安倍晴明が、次々と怨霊を退治するという映画がありました。当時は天変地異は怨霊の仕業と信じられ、陰陽師は中国から導入された陰陽五行説を頼りに、怨霊と戦っていました。

陰陽五行説とは万物は全て陰と陽そして木火土金水の五成分に分類されるという考えです。五行説では東方は木で色は青、西方は金で色は白、南は火で色は赤、北は水で色は黒、中央は土で色は黄となります。そのため古墳の石棺の周囲には、東の守護神として青竜、西の白虎、南の朱雀、北の玄武が描かれたのです。ちなみに中央には石棺が置かれていますが、神獣とし

てはキリンビールのラベルにある麒麟が想定されて五行に対応したと考えられます。

現在でも相撲の土俵の四方には青、白、赤、黒の房が下がっており、東で寄り切られると青房下とアナウンスされます。また幕末の悲劇白虎隊は、会津若松城の西方を守る16歳前後の藩士の子弟で構成されており、他に青竜隊、朱雀隊、玄武隊も実在していました。

身近には七曜の日月火水木金土も陰陽五行から採っていますし、京都の南北を走る朱雀大路など今でも当時の名残りが残っています。

体の守り神

古代の医学も五行説を元に考えられていました。人体の臓器、肝・心・脾・肺・腎を五臓と呼び、それぞれが五行の木・火・土・金・水に対応します。漢方医学の基礎を作った1800年前の中国の医師張仲景は、その著書である傷寒論ショウカンロンという本に四獣神にちなんだ処方に記載しています。

青竜湯は麻黄という青色の生薬を主薬にしています。中国の東方は海に面しており、湿気が多く、湿によって喘息やリウマチなどの病気が起こると考えました。麻黄は体を温め湿を除く作用があり、大・小の青竜湯はそれらの特効薬です。一方中国の西方は砂漠があり、乾燥地帯です。乾燥によって起こる病気に糖尿病やアトピー性皮膚炎があり、白虎湯がよく効きます。白虎湯の主薬は白い石膏で体を冷やして潤す働きがあります。

続いて北方は寒冷地帯ですので、体を熱する薬が必要となります。主薬はトリカブト事件で有名となった黒色の附子ブシです。それを配合した処方が玄武湯で、寒冷のため起こった下痢や胃腸障害に用います。皇帝の玄武と同じ名は失礼になると途中で真武湯と改名されたとのことです。

そして残る南方を守るのは朱雀湯です。この処方内容は現在諸説ありますが、十棗湯ジュウソウトウという赤色の大棗ダイソウの入った処方と考えられています。この薬は作用が強いため現在はほとんど使われていませんが、ここによくやく体をさまざまな外敵から守る四つの薬方が揃いました。

一枚の絵 ——「開かれた門」——

広島市東区曙 江川政昭

門とは、広辞苑によれば、本来、家などの外構えに設けた出入り口を指すが、そこから徳に入る門、狭き門など物事の出入、経由する所、あるいは門弟、同門など師について教えを受けること、その仲間、などさまざまな意味を持つ。

芸術の分野でも古今東西、数多く表現されてきた。私の知る限りでも、彫刻の分野でフィレンツェのサン・ジョバンニ洗礼堂の扉に彫られたロレンツォ・ギベルティの「天国の門」、上野の国立西洋美術館にも納められているロダンの「地獄の門」、そして広島には現代美術館に納められているムーアの「門」。そして文芸の分野でも夏目漱石の「門」、五木寛之の「青春の門」など。

今回、それらの作品とは比べようもないけれども、「開かれた門」(写真)という作品を描きあげた。これは広島市東区矢賀にある浄土真宗「覚法寺」の本堂と門を描いたものである。この本堂は築300年以上を経ていると言われるが、私もそのお寺の信徒の一人である。

この絵を描くきっかけは、3年前になるだろうか、覚法寺のご住職から、2～3年後には御子息の若院さんに住職を引き継ぎたいというご意向をお聞きしてからである。そしてその記念事業として本堂の修復工事をしたいとのことであった。以前より、お寺の為に何か自分にでき

ることはないかと考えていたが、この機会にこの覚法寺を描くことを思いついた。そして許されればお寺に納めていただければと考えた。

それから描き始め、何度も手直しなどを経て、完成までに2年近くかかった。最初に描いた絵は本堂と門のみであった。しかし、本堂と門だけでは自分の絵の技量不足か、思いが伝わらない気がした。この本堂の裏にはこのお寺の門徒の人たちの縁故者や先祖が眠る墓地がある。もちろん私の両親も眠る墓もある。この本堂と門を描くことは、両親をはじめ先祖が眠る浄土を描くような気持ちもあった。そこで、この門をくぐって本堂やお墓にお参りする人を描き加えることにした。この絵の中のお参りする3人は私とは顔、形は違うけれども、気持ちは自分自身を表しているようなものである。仏様からお浄土への門はいつも開かれているぞという声が聞こえてくるようである。月日のたつのは早い。やがては私自身もこの門をくぐりお浄土に導かれていく。

今は、本堂やお墓をお参りする度に、門の前で一礼して門をくぐり、そしてまた、門の前で本堂や墓地を振り返り一礼をして帰っていく。生きている喜びをかみしめ感謝しながら一日一日を大切に生きていきたい。

平成20年3月、春彼岸の日、この絵は覚法寺の門徒会館に納められ、門信徒の皆さんに披露された。

合掌

